

# 平成二十四年度調査研究シンポジウムの概要

大 高 洋 司

平成二十四年度の調査研究シンポジウムは、二〇二二年六月七日

(木)一五・三〇～一七・三〇、「近世における蔵書形成と文芸享受―文学研究の視点から―」と題して開催された。内容は、昨年度からスタートした国文学研究資料館基幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」(二十五年度 研究分担者三十一名 代表・大高洋司)の中間報告である。

今回のシンポジウムの趣旨については、あらかじめ以下のようにまとめて出席者に配布させていただいた。

本プロジェクトは、過去四十年にわたり国文学研究資料館が行ってきた調査収集の対象となった所蔵先のうち、すでに終了、またはほぼ日途のついた七箇所を全国から選び、近世期に形成されたそれぞれの蔵書における文芸資料の位置付けについて、ジャンルを超えた複数の専門家の視点による総合的検討を進めている。

このたびのシンポジウムでは、宮廷の周辺・大名家・地方豪商の三所蔵先における、文芸資料の概要と享受の実態を報告すると共に、文学研究の立場から蔵書研究に新たな光をあて、認識を深めるきつ

かけとしたい。

具体的には、「宮廷の周辺」⇨新日吉神宮蘆庵文庫(京都市)、「大名家」⇨祐徳稲荷神社(佐賀県鹿島市)、「地方豪商」⇨手銭記念館(島根県出雲市)所蔵の資料をめぐる研究報告である。順に、タイトル・報告者・報告要旨を摘記する(なお、司会進行は大高が担当)。

1 加藤弓枝氏(豊田工業高等専門学校・准教授)

「非蔵人の文学的営為―身分的境界層の果たした役割―」

要旨⇨蘆庵文庫の特徴を指摘するとともに、所蔵される非蔵人関連

資料を通して、宮廷周辺にいた彼らが、白らの立場を活用し

ていかなる活動をしていたのか、その実態を述べる。

2 川平敏文氏(九州大学・准教授)

「肥前鹿島藩主鍋島家の神道書とその周辺」

要旨⇨神道書の蔵書形成を中心に、あわせてその周辺の歌書のこと

などを報告する。

3 田中則雄氏(島根大学・教授)

「手銭家蔵書と出雲の文芸活動」

内容：手銭家蔵書の特徴について概要を述べた上で、その形成過程について、また近世出雲地方における和歌・俳諧のネットワークと同家との関わりについて、現在までの蔵書調査を通じて把握し得たことを報告する。

加藤氏は、蘆庵文庫の概要報告の後、藤島宗順を中心とする非蔵人・院蔵人文書に基づいて、非蔵人の間で書籍講が行われていたことを紹介し、進んで真仁法親王などの公家と小沢蘆庵など地下文人をつなぐパイプ役を担っていたことを述べられた。

川平氏は、祐徳稲荷神社中川文庫の蔵書中、垂加神道系の神道書に注目し、ことに、鍋島藩主四代直條に神道及び古今伝授を行った人物として伊藤栄治、六代直郷と関係の深い神道家・文芸家として井田道祐を挙げ、新出資料「神道伝授函」(二六四点)が、両名と鍋島家を結ぶ知見の深化に大きな役割を果たすものであることを述べられた。

田中氏は、「手銭」チームの責任者として、時にメンバーによる成果を踏まえながら、近世期、松江藩・出雲大社とのかかわりの深かった豪商手銭家の蔵書・文芸活動を概観された。特に三〜七代については、それぞれの蔵書印を紹介し、地域の指導者(冠李・百羅)と結びついた俳諧活動に触れ、また和歌和文に堪能だった七代有頼の妻の子の活動について、富永芳久(出雲大社権禰宜)との往復書簡に即して述べられた。

その後、フロアとの質疑応答では、検討対象の広さと分析視点の多様

さを反映してか、必ずしも包括的な質問は出なかった。しかし、本研究の代表者としては、個別の検討の並列に終わらず、対象とした各蔵書を貫く特徴(「近世的」と言えるかどうか)を拾い出そうとする努力が、蔵書ごとの、あるいは研究者各個の興味に基づく調査の限界を超えることにつながるかと考えている。例えば、加藤氏の資料に掲載された「公家を対象とした研究と、庶民レベルの蔵書形成の研究との接点を求めること」(浅田徹氏「堂上から地下へ―典籍の流出・提供・活用」、「調査研究報告」32、平成24 大高による要約)、川平氏が試みたように、狭義の〈文芸〉ばかりでなく、従来〈思想史〉資料と見なされてきたものを含めて、蔵書の内容をより広く見渡すこと、また、手銭家蔵書にも含まれる実録などの〈俗〉なジャンルが果たす役割などについても、今後検討して行きたい。

加藤・川平・田中三氏には、ご多忙の中、ご発表内容を改めて論文のかたちで寄稿していただいた。本研究、またそれに続く蔵書研究への指標として味読したいと思う。